

Title	『金瓶梅詞話』所引「黄氏女卷」訳注稿
Author(s)	田中, 智行
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91551
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『金瓶梅詞話』所引「黄氏女卷」訳注稿

田中智行

はしがき

以下に『金瓶梅詞話』第七十四回において上演される「黄氏女卷」を訳出する。この宝巻には明刊の折本ものこっているというが¹、いま見る手立てがなく、『三世修行黄氏宝巻』などの題で清代以降の刊本が残っている。広く流伝した宝巻だが、『金瓶梅詞話』中の引用は、現在知られるその最も古い形をとどめる²。

底本には『金瓶梅詞話』影印本（大安、1963）を用いた。ただし詞話本には誤りが多いので、白維国・ト鍵『金瓶梅詞話校註』（岳麓書社、1995）をあわせて参照し、同書の校訂に従った場合は一々注記せず、本文を正した上で訳出した。そのほか、梅節『金瓶梅詞話校註』（北京図書館出版社、2004）やデイヴィッド・ロイによる『金瓶梅』英訳（David Tod Roy tr., *The Plum in the Golden Vase, or Chin P'ing Mei*. 5 volumes. Princeton: Princeton University Press, 1993-2013）により本文を改めた箇所については、適宜注釈に記した。

この訳注稿は訳者が現在進行中の『金瓶梅』翻訳³の一部をなすものであり、小説の翻訳全体の原則として、斉言句は日本語でも文字数を揃えている。原作の風格がよりよく保たれるようにとの工夫ではあるが、これにより韻文などが厳密な逐語訳になっていない場合もある。大方のご叱正を乞いたい。

訳注稿

聞くならく、法はそもそも滅びぬものゆえ、入滅せしは空に帰するため⁴。道はもともと生じることなく、生起して用をなすものに非ず。法身⁵によって八相⁶を示し、八相によって法身を顕す。煌々たる智慧の灯火は、この世の扉を開け放ち、あかるく輝く仏の鏡は、暗い道をも照らし出す。百年の光景は刹那のうちに、四大⁷の幻身は泡影もおなじ。まいにち世事にあくせくし、つねに悪業に追い立てられ⁸、性を円かにできる由もなく、六根⁹に食欲をはびこらせる。功名の世を蓋ったとて、長大な夢にほかならず、富貴の人を驚かすとも、無常の二字は免れえぬ。風火の散りゆくに老少の隔てなく、山河の磨りへれば英雄は影もなし¹⁰。我、十方に偈を伝えて、八部¹¹を壇に集

¹ 車錫倫『中国宝巻総録』（北京燕山出版社、2000）は「仏説黄氏女看経宝巻」の項に李世瑜氏旧蔵本を著録する。

² 澤田瑞穂「『金瓶梅詞話』所引の宝巻について」（『増補 宝巻の研究』国書刊行会、一九七五）を参照。

³ 『新訳金瓶梅』鳥影社。上巻（2018）、中巻（2021）は既刊。

⁴ 底本「故帰空」。李開先『宝剣記』第四十一齣は同じ箇所を引いて「故帰滅以帰空」に作る。ただし更に遡ると唐・張鷟の文に出典があり、そこでは「故現滅以帰空」となっている（「大雲寺僧曇暢奏、率僧尼錢、造大像高千尺、助国為福。諸州僧尼訴云、像無大小、惟在至誠。聚斂貧僧、人多嗟怨、既違仏教、請為処分」『全唐文』卷一七二）。

⁵ 仏の三身の一つ。真理そのものとしての仏。

⁶ 釈迦八相。釈迦がこの世で現した、降兜率から入滅までの八種の相。

⁷ 地水火風。万物を構成する四元素。

⁸ 底本「終朝業試忙忙」。「業試」は『宝剣記』では「孽識」に作る（脚注12を参照）。

⁹ 眼、耳、鼻、舌、身、意の六つの感覚器官または機能をいう。

¹⁰ 「百年の」からここまでは宋・宗鏡禪師『銷釈金剛科儀』巻一に基づく。

¹¹ 八部衆。天、龍、夜叉、乾闥婆ら、仏法を守護する仏の八眷属。この二句は唐・劉禹錫の「深法師の南岳に遊ぶを送る（送深法師遊南岳）」詩に基づく。

めん。火宅^{かたく}の苦しみを救い、空門^{くうもん}の鍵をひらかん。偈にいわく——

富貴^{ふうき}貧窮^{ひんきゆう}はそれぞれ故^{ゆえ}あり
縁にて定まれば求むる勿れ
春に種まくこともせざるに
荒れ^あ田^たで豊作^{ゆえん}ねがうも空し¹²

菩薩さまがた¹³、貧僧^{それがし}が仏法を説きあかすをお聞きくださるとあらば、この四句の偈こそは、古^{いにしえ}のお祖師さまが遺^{のこ}されたもの。「富貴貧窮はそれぞれ故あり」とはなぜかというに、いまここにいらっしゃる菩薩さまがたが、お役人さまに嫁がれて、官位は高くその禄厚く、奥深いお屋敷に住まれ、下男や下女を使われて、頭に金を挿し銀を冠^{かむ}り、綾錦の巢のなかで育ち、晴着^{はれぎ}の山のなかに生れ、着るものが欲しけりや綾錦を千箱、食べものが欲しけりや馳走が百味、栄華を享^うけ、富貴を受け——という具合なのはすべて、前世の謂れのなせるわざ。根本に一大因縁のあればこそ、求めずして得られるという次第^{それがし}。貧僧^{かんきん}がここで看經念仏し、さらにおいしいお茶やご飯、善心からのお布施を頂戴できるのも、たいへんなご縁にて尋常ではなく、みなこれ龍華会^{りゅうげえ}¹⁴につどう者どうし、いずれも前世で修めた功德のお陰。もしも修めていなければ、春に種まきせぬようなもので、みのりの秋になったとて、一面の荒れた田畑^{でんぼた}に、実^みの熟^{じゆく}しようはずもなし。まさしく——

霊台^{れいだい}を掃ききよめてしっかりと励み
心満たされ嬉しくとも気を緩めるな
五濁^{ごじよく}¹⁵と六根とを努めてきれいに洗い
法門^{ほうもん}を究めて仏祖^{おしえ}の家風を知るべし

また——

百年の光陰はまばたきのうちに過ぎ
この身はいつか灰と舞い散るさだめ
生きて悟りを得んとする者あらんか
生^{つねにかわらぬ}じぬ悟りの境地へと身を退^ひく者は

また——

人の命^{いき}は息するあいだの無常のもの
目に映るは西山に墮ちゆく赤い夕日
宝の山を巡り尽してむなしくかえり
一度^{ひとたび}人の身を失^{えいごう}えば永劫^{ふく}も復し難し¹⁶

富貴や栄華というのは、思えば湯を雪にかけたようなもの。よく考えたならば、どちらも取る

¹² 北宋の道士・徐守信による無題の詩三首(其二)に基づく。宝巻の冒頭からここまでは明・李開先『宝剣記』第四十一齣(林沖の母の葬儀を描く)でも引用されている。

¹³ 聴衆に呼び掛ける。

¹⁴ 弥勒菩薩が世に出たとき、龍華樹の下で衆生済度のためにひらく法会。

¹⁵ 現世に満ちている五種の汚濁。

¹⁶ 以上三首のうちの第二首と第三首は、『銷積金剛科儀』巻三にそれぞれ見える他、『宝剣記』第四十一齣にも逆順で引かれている。

に足らぬ、人を驚かせる夢^{ゆめまぼろし}幻にすぎない。いまは人の身を得たれども、心のうちでは悩み苦しみ、死ねば四大は塵となり、魂のいづこへ赴き苦難を受けるかも知れず。生死輪廻をおそれるならば、いま一步を踏みだすべし。

(歌)
〔一封書〕

生と死は向かい合わせ
浮世を嘆いていつも^{あくせく}齷齪
男^{むすこ}や女^{むすめ}が堂満たしても
無常の訪れ受けるは自分
人生は春の夢のように短く
運命は風の^{ともしび}灯のごとく^{はかな}儂し¹⁷
思うだに
悲しきを
口に出せば^{はらわた}腸もちぎれんほど¹⁸

巻頭にいわく、化身^{あらわ}を顕しとこしえに苦難を救う仏には、そもそも行くとか来るといことがない。教主たる^{みだ}弥陀(阿弥陀)の^{ふさい}普済の願いは広く深大にて、^{しじゅうはちがん}四十八願を立てて衆生を救い、各人にその本性^{ほんせい}を悟らしめんとする。弥陀はいま、心きよらに苦海の^{くがい}渡しをつかさどり、苦海の高波かきわけて、^{ぼだい}菩提の妙果^{しじょう}を証させんとする。これを念じる者は恒河沙ほどの罪も滅ぼし、これを^{たた}称える者は無量の福を増し、^{しよしやどくじゆ}書写読誦する者は華蔵世界に生まれ変わり、目にし耳にして心にとどめる者は臨終のとき定めて西方浄土へと赴くべし。およそ念仏する者には必ず無量の功德あり。慈悲をたまわりたるがゆえ、慈悲をたまわりたるがゆえ、大慈悲をたまわりたるがゆえ。一切の仏法僧に帰依し、とこしえなる三宝を信じ敬わん。法輪のつねに転じて衆生を度さんことを¹⁹。偈にいわく――

この上なく深き^{たえ}妙なる法には
百千万劫^{ごう}経ても出会いがたし
いま耳にしたなら心に刻んで
如来の^{まこと}実の教えをば了解せん²⁰

黄氏の宝巻をはじめて開けば
諸仏に菩薩らは降臨したもう
炉の香は虚空あまねく満ちて
仏の名号は九天をも揺るがす

むかし漢王の^{みよ}御代のこと、順調なる風と雨、安泰なる国と民との感ぜしめるところ、ひとりの善心の奥方が世に出ることとなった。曹州南華県(いま山東省)の黄員外の娘は、おごそかにも美しい容色であったが、わずか七歳にして精進のみを口にするようになった。金剛経を念じて父母の大恩に報いることを毎日かかさなかつたので、これに感じた^{かんぜおん}観世音菩薩が中空に顕現した。父母は娘が一日じゅう経を念じているのをみて、どうにかやめさせようとしたが従わなかつた。

¹⁷ ほぼ同じ二句が『銷積金剛科儀』巻八に見える。

¹⁸ この〔一封書〕の曲も『宝剣記』第四十一齣に引かれている。

¹⁹ 「慈悲を」以下、『銷積金剛科儀』巻一に基づく。

²⁰ 同じ偈が『金瓶梅詞話』第五十一回の『金剛科儀』上演にも見える。

ある日、両親は口利きをたのんで、めでたい日柄と時刻をえらび、娘を嫁がせた。嫁いだ男は姓を趙、名を方といい、屠畜をなりわいとしていた。夫婦として十二年のあいだに、一男二女をもうけた。ある日、黄氏は夫に告げた。

「あなたとは夫婦になって十二年、坊やも娘も生んだけど、恩愛にとらわれたままならば、永久の苦しみに沈みます。こんな小唄がありますよ、亭主どのどうかお聞きあれ」

その歌詞にいわく――

宿縁しゆくえんで夫婦むすばれて
息子も娘もあるけれど
無常むじやうに敵うはずもなし
旦那様だんなさま伏して願います
同じ決心してください
ともに修行し
寿命を終えん
富ふうやら貴きやら
お払い箱にし
名めいと利り貪ることやめて
分ぶん相そう応おうに過すごしましょう

夫の趙は、この歌詞にしたがうことはできぬと、ある日、別れを告げて出立し、山東へ豚を買いにいった。黄氏は夫が行ってしまったのを見ると、清らかな部屋で休んでは、沐浴をして焼香し、金剛経ほうじゆを奉誦して過ごした。

令方いまや山東へと去り
四人の子女は中の広間に
黄氏は、西の部屋で、香り湯を浴み
着替えかざり、簪珥かんざりはずし、質素な身なり
日ごと、西に向かい、焼香礼拝して
念珠と²¹、宝巻を目に、金剛経を誦よむ
看経も、終わらぬに、香煙は散って
念仏の、声は朗々と、蒼穹そうきゆうつらぬく
地獄門、天国にまで、光はあふれて
閻魔は、ひと目みて、龍顔りゆうがんを綻ほころばす
「もしや、生者の世に、仏祖が出たか」
大急ぎ、判官二人に、委細調べさす
判官が、大王さまへ、お察しあれと
「曹州府、南華県なる、善良の者あり
経文を、誦よむは黄氏、食しょくは精進のみ
心善く、徳行すぐれ、天国を驚かす」

(歌)

[金字経²²]

閻魔王これを聞いて内心あわて

²¹ 底本「面念顔」。読めないなので、ロイの英訳を参考に「顔」を「珠」の誤りとみなした。

²² 底本「金剛経」に誤る。

いそぎ遣わしたるは無常の鬼のふたり組
ふたり趙家莊へと急行すれば
黄氏はまさに看經の真っ最中
目の前にいきなり仙童あらわれて

(誦読)

「善人は童子が迎えにあがります
悪人は夜叉が連れにまいります」
經を読んでいた黄氏はあわてて
「どこの童子さんが迎えにきたの」
仙童が奥方にこたえて言うには
「心がけ善き奥方お焦りなきよう
この世の親類の使いにはあらず
あの世からきた童わらべでございます
あなたがお經を読んでいるゆえ
閻王えんおうは心がけ善き奥方をご招待」
言われて黄氏は心穩こゝろやかならず
凡心より無常の鬼くに繰こり言ことして
「同姓同名の人を引ひっぱってって
どうして私がしよびっ引ひかれるの
千遍万遍死んだとてかまわぬが
息子に娘二人置いていけますか
上の娘きょうこの嬌こ姑こもまだやっとな歳
六歳ほんきようの伴嬌ばんきようも母なしでは済まぬ
かわいい息子の長寿は年とし三歳で
いつもふところ懐ふところに抱き忘れようもなし
この一命を見逃してくれたなら
其方そなたのためたくさん沢山功德積みまする」
仙童が奥方に答えて言ったには
「あなたほど金剛經きんごうきん誦よむ者はなし」

善悪二童子²³は、黄氏に泣きつかれた。どうしても冥土へは行きたくない、三人の子どもがかわいくて、捨てていくなどできません——。仙童はせきたてて言うよう、「心がけ善き奥方よ、“あの世で三更にお呼びなら、おまけで四更に変えられぬ”と申します。娑婆で期限が延ばせるのとは、わけが違ふのです。冥府があなたを呼ぶのに、もし刻限をたがえれば、私が罪を得るのです。寿命が長い短いのと、軽々しくは言われぬことです」

黄氏はこのとき考えをめぐらし
下女を呼び湯を沸かしにいかせ
香り湯で沐浴をし終えるや否や
すぐさま我が身を仏堂へと運び
脚を組んで座り一言も口にせず
一靈の真性は閻王まみに見えんとす

(歌)

²³ 人の善事悪事を記録する二人の童子。

〔楚江秋〕

人生は夢のごと
光陰は常ならず
危うきに臨めば誰もみな風前の灯
すぐさま歩を返し閻王のもとへ
急きゅうごしら拵しらえの旅装束にて
望郷台²⁴から家郷眺めれば
息子も娘も泣きの涙にて
鉞シツバルと太鼓にて齋場を設け
喪の出で立ちにてお弔い

(語り)

令方が悲しんだことはさておき
黄氏の霊の冥土への道行述みちゆきべん
見る間に奈河の岸へ着いたれば (奈河は地獄の川)

ひと筋の金の橋が彼岸へと導く
「この橋は何の為あるのでしょうか」
「看経し念仏する者のみ渡れます」
奈河の兩岸には血の波が流れて
河の中に沈むは無数の罪ある魂
悲しみわめき泣いて騒がしきに
筋かりがりの浮く亡者を四方より毒蛇咬む
進むうち至りし山の名は破銭山
黄氏進み出てその由来を問えば
「浮世の人らが紙銭を燃やすとき
焚きあげきらぬのを捨てるゆえ
欠片がたくさん舞いただよって
積み重なったが破銭山のいわれ」
さらに通りかかったのは枉死城
転生できず彷徨うは無数の孤魂
黄氏はこれ見て心に慈悲おこし
口を開き直ちに唱えたは金剛経
奈河なる罪人らみな眼をあけて
刀山も劍樹も月宮の林へと変じ²⁵
茹釜ゆでがまにも火の池にも蓮華が現れ
無間地獄には瑞雲が立ち籠める
そこで仙童はあせり落ちて着かず
いそぎ閻君のもとへ走りご注進

(歌)

〔山坡羊〕

²⁴ 原文「郷台」。死後の魂が現世の我が家をあの世から眺めるための台。

²⁵ 底本「尸山爐別樹成林」。梅節『金瓶梅詞話校読記』が「刀山劍樹成林」と改めるのに従った。

黄氏が森羅の宝殿に着けば
童子がまずはご奏上
「看經の者をお連れしました」
閻魔王の伝令で召し出され
黄氏は金の階の下より拝礼し
やむなく面前にひざまずく
閻君からのご下問あって
「いつから金剛經を誦みはじめたか
感じ入った觀世音の
顯現したるは何年何月何日」
黄氏は合掌し事情を訴えて
「七つの時よりなまぐさを断ち
仏さまを供養してございます
大王さまどうかお聞き届けを
夫に嫁いでからとても
看經する気持は衰えず」

(語り)

閻君はそこでいそぎ伝達させて
「心がけ善き奥方よ篤と聞かれよ
金剛經には都合幾つの字ありや
どれ程の点と画とが絡み合うや
どういう文字から始まりたるか
真ん中にあるのはどの二文字か
もし經を念じて間違いなければ
魂を娑婆へと返して遣わそうぞ」
黄氏はすぐ階の下で立ちあがり
「大王さま金剛經をばお聞きあれ
字数は五千と四十九ございます
点と画の数なら八万と四千にて
如の字に始まり行の字で終わる
真ん中にあるのは荷担の二文字」
黄氏が經を語り終わらぬうちに
閻王の宮殿の前に光はあふれて
手を挙げ龍顔にはまことの喜色
「魂を娑婆へと返して遣わそうぞ」
黄氏はこれを聞くと慌てて頼む
「大王さま枉げて叶えて下さいな
一つには屠畜の家に遣らないで
二つには染物の商いもご勘弁を
善行積む家の子にしてください
看經念仏して過ごしたいのです」
閻魔王は筆を取り即座に断下し
「曹州の張家の子に転生させよう
あの家は積上げた財産多かれど
墓前に参る孝子だけ欠いている
員外は夫妻ともども善を修めて

その名は四海^{しがい}に鳴り渡っている」
迷魂湯^{めいこんとう}²⁶を一杯飲み終えたとたん
張家の奥方はお腹に子を身籠り
十月^{とつき}満ち足り生まれた一子には
左の肋^{あばら}の上に赤く二行記されて
「この子こそは看経せし黄氏の娘
観水^{かんすい}の趙令方にかつて嫁ぎし者
経を誦めば善報^{ぜんぼう}多くあるがゆえ
男子となって寿命^{じゅみょう}長きを得たり」
張員外は自らそれをたしかめて
宝物のごと可愛がり喜色^{うか}浮べる

(歌)

[皂羅袍^{そうらぼう}]

黄氏は張家に生まれ変わって
男の身もびったりよく似合う
員外はこれを見て喜び^{いや}増し
三年のうちには人らしく育ち
わずか七歳にして聡明利発
勉強して字を習い
俊達と名づけられ
十八歳にて科挙で進士に

さて張俊達は、十八で科挙に合格し、曹州南華県にて知県に任じられた。ふと思い出したのは、これが自身の故地であること。役所で着任すませると、まずは年貢のぐあいを調べ、それから庁堂で審理する。使いの者をふたり出し、すぐ趙令方を呼びにやって、「話がある」と伝えさせた。使いのふたりはおろそかにもせず、すぐさま趙家へ令方を呼びにやってきた。

(語り)

趙令方、家にあつて、看経念仏中に、
二使者、挨拶する故、用事を訊ねる
すぐに、身なり整え、県の役所へと
庁堂で、いそぎ低頭、名乗り出れば
張知県、立って辞儀、椅子を勧める
挨拶し、主客に分れ、茶が運ばれる
「其許^{そのもと}は、我が夫なり、名前は趙令方
我こそ、かつての妻、黄氏そのひと
疑わば、場所うつし、服脱ぎ見せん
左^{ひだり}肋^{あばら}に、朱砂^{しゆしゃ}の文字、いわれを記す
長女の、嬌姑^{きょうこ}は既に、人にかたづき
二女の、伴ちゃんも、曹真^{ほん}に縁づく
長寿が、気掛りです、墓^み看てくれて
二人で、馬に乗って、いざ墓参せん」

²⁶ 亡魂が転生するに際し、前世のことを忘れさせるため飲ませる薬湯。

知県は令方や子どもらと五人、黄氏の墓まで行って棺を開けてみれば、遺体の顔はそのままだった。もどると七日間の法要を営み、令方が金剛経を読むと、瑞雪の降りしきるなか、男女五人揃って、祥雲に乗り天へと昇ったのだった。その証拠となる〔臨江仙〕の一首があって――

黄氏は経を読み正果を成し
同じ日に極楽をめがけ
家族五人みな天に昇る
善人は観音を語り伝えよ
菩薩よ来たりて我を済度したまえ²⁷

宝巻すでに宣べ終わり、仏聖すでに知ろしめす。法界は有情なれば、ともに転生して極楽に集わん。南無一乗宗、無量義、真空と妙有を説く金剛般若経²⁸。遙かなる諸仏の大会につぶさに聞こえ、恒河の沙のごとき衆生みな浄土へ導くべし。伏して願うらくは看経念仏の声の、上は天堂、下は地府へと届き、仏を念じるものは苦海を離れ、悪を作せるものは永久の苦しみに沈まんことを。悟りを得しものを諸仏がみちびき、その放つ光明が十方を照らさんことを。東より西より照り返されて、南へと北へと家郷を訪ねられることを。不生不滅のさすらい舟が彼岸に到り、子どもらが実の母に会え、母の胎に入って三災²⁹（水火風）をおそれず、八十劫も永遠に安らかならんことを³⁰。

偈にいわく――

衆生の造りし悪業のかずかず
太古にはじまり現在にいたる
霊山より離散して真性迷うに
一点の霊光は生類を遍く照す

一には報いん天地載するの恩
二には報いん日月照らすの恩
三には報いん皇王の国土の恩
四には報いん父母の養育の恩
五には報いん祖師の伝法の恩
六には十類の孤魂³¹らに報い早の転生祈らん
摩訶般若波羅蜜

（本稿は科学研究費補助金（23K00335）による成果の一部である）

²⁷ 底本「菩薩未度我」。未は来の誤りと見なした。

²⁸ 底本「南無一乗字真空」（字は宗の誤り）。『銷積金剛科儀』巻九に従い、後ろに「妙有金剛般若経」の七字を補った。

²⁹ 底本「三実」に誤る。

³⁰ 底本「八十部永返安康」。「八十劫永遠安康」の誤りと見なした。

³¹ 陣没、餓死、客死など十種類の非業の死をとげた孤魂。